COLOR

D－Dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＯＬＯＲ

【Ｎコード】
Ｎ６０２１Ｅ

【作者名】
Ｄ－Ｄｒｅａｍ

【あらすじ】
主人公・蒼は記憶を失い、誰にも助けられなかったところを銀介に拾われ、特殊能力・サイの使い手だと判明。サイ使いの集団・ＣＯＬＯＲのメンバーとして、永遠の原動力・ヒカリのカケラを集めるため、戦う。

第1話（前書き）

変なところ、間違い、意味不明なところはたくさんあると思います。

第1話

ある者は、永遠の光求めて天より高き山登る。
ある者は、深き海の神に戦いを挑む。
ある者は、神々の作り出した力を操ろうともくろむ者がいる。
そして彼らは、永遠の原動力を手に入れるため、動き出す。
そう、彼らこそサイ使いの集団・ＣＯＬＯＲだ。

僕は何故生まれたの？
僕は何故生きているの？
僕はいったい……。
雨が降るなか、僕は軒下に座り込んでいた。何があったのか、ここはどこなのか、何も思い出せない。はは、僕は何を考えているのだろう……。名前すら思い出せないのに。
道行く人々は、僕が見えてすらいない。まるで、そこにあるのは人ではなく誰にも気に留められない小さな小石のように。いつか餓死するであろう、存在価値など無い少年のことなどどうでもいいことだ。皆、見て見ぬふり。誰も助けを差し伸べてくれない。
――僕はこのまま死ぬのだろうか……。
「キミ……　どうしたの……　家は？」
見上げると、銀色の長髪の男が立っていた。僕は、横に首を振った。
「そう、何も分からないか……　ちょっとゴメンね……」
銀髪の男は、しゃがむと僕の額に手を当てて目をつぶった。ほのかに暖かい。何秒経ったのだろうか。しばらくそうしていると、ふっと光が消えた。
「サイの持ち主……。キミ、一緒に来るかい？」
僕は、思わず自分の耳を疑った。存在価値なんて無いはずの僕を、

必要にしている人が目の前にいるのだから。
僕は、ついていく事にした。僕を必要としてくれている。僕の唯一の居場所をつくってくれた彼に。

第2話

彼の名は、虹崎（にじざき）　銀介（ぎんすけ）。彼は、僕に名前をくれた。虹崎（にじざき）　蒼（あお）。それが、僕の名前だ。

僕の中に眠る力。それを、彼は見出した。その力こそ“サイ”。色に秘められた力を操る力で才能と色彩からとった名前だそうだ。だが、誰もが持っているわけではない。僕には、青のサイがあったそうだ。

ちなみに、サイは赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の7種と白、黒、そして滅多にいない虹の3種の計１０種。そして、このうち1つでも使えるサイがあれば、その者はサイ使い。サイ使いは、ＣＯＬＯＲのような集団に所属する。そして、外部ではサイに関することなどを話すことは禁止されている。理由は分からない。

そして集団ごとに目的は違ってくるが、ＣＯＬＯＲは“永遠の原動力”と言われる“ヒカリのカケラ”を探すことを目的としている。この、ヒカリのカケラはＣＯＬＯＲ本部のエネルギー源として利用されているらしい。ＣＯＬＯＲ本部は、空に浮いている。サイの存在を隠すためだとか。その浮遊用のエネルギーとして利用している。

ＣＯＬＯＲのサイ使いは、ヒカリのカケラを集めたりしている。他の誰よりも早く全てを集めるために情報を手に入れたら即実行。そして、僕も銀介に拾われ、サイ使いとして働き始めて6年の月日が経ち、１４歳になった。

１４歳になってある日、僕は食堂で喧嘩中のある2人と出会った。

「だ～か～ら～……　プリンに一味をまるまる1瓶かけるほうがおかしいっ！」

「違うっ！！　プリンに砂糖大さじ1杯かけるほうがおかしいんだっ！」

「あっ……　あの……」

僕がその2人を止めようと、声をかけようとすると僕の後ろから

怒鳴り声が聞こえた。

「テメェら、帰ってきて早々ケンカしてんじゃねぇぞ！！　白狐（びゃっこ）！玄（げん）！」

第3話

久しぶりに見る、怒った銀介。長い髪がまるで、蛇のようにうねっている。この後、さらに怒り目が赤く光るともう誰にも止められない。僕も昔、銀介さんの逆鱗に触れたことがある。その時は、怖かったの何の。サイをところかまわず使って、破壊しまくり。壊れた所は、クリスタルで直るまで塞いであった。

「銀介さん！！　コイツが悪いんです！！」（ハモリ）

「どっちの言い訳も聞かない……　喧嘩両成敗だぁ！！」

銀介は、サイで持ち手の長い斧を作り出しケンカしていた2人に向かって走り出した。そして、跳び斧を振りかざした。が、2人のほうもサイの使い手のようで黒髪の方は日本刀のような剣と青竜刀のような剣で、銀髪の方は変わった形のトンファーで受け止めた。

「両成敗じゃ納得いきません！」（再びハモリ）

2人はいきピッタリで、銀介の斧を跳ね返し同時に銀介をけった。

「銀介さん！！　大丈夫ですか！？」

銀介は、ため息をつくと立ち上がった。髪が元に戻っていて、怒りが治まったようだ。

「さすがは、“黒夜叉（くろやしゃ）”に“白阿修羅（しろあしゅら）”だ。戦いのエキスパートだな。手が出ないや」

「実践で経験を積んだんだからな。……で」

2人の視線が、僕に向かう。

「……あ、そうだったな。こっちは、藤田（ふじた）　玄（げん）。通称黒夜叉。黒のサイの持ち主で、かなりの甘党」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

黒髪の方が、頭を下げた。

「で、こっちが小雪（こゆき）　白狐（びゃっこ）。通称白阿修羅。白のサイの持ち主で、見た目は男っぽいけど女ね。確か、辛党だから気をつけてね。一味

1瓶かけられないようにね」
「……よろしくな」
「よろしくお願いします」
銀髪の方が、腕を組みながらぶっきらぼうに言ってきた。
「で、コイツが蒼。6年前に来たってメールを送ったから、わかると思うけど。あ、玄。しばらくコイツのサイの訓練見てやってくれ。ちょうど、オレよりも上になりつつあるし。いきなりで悪いけど、たのむよ。じゃ」
銀介は、それだけ言い残し食堂に入って行った。
「え……　オレ？」
「……」
「……」
「……ま、頑張れ」
そういうと、白狐は去っていった。
「……よろしくお願いします」
「あ、ああ。お互いに」

第4話

２人は、訓練所的なところに向かって歩き出した。しばらくして急にモゾッと、黒夜叉の懐から何か黒い小さなものが出てきた。そして、

「フィー！！」

と、鳴いた。

「うわぁっ！！　な、何ですか！？　それは！！」

「ああ、この子？　この子は、ノームって言うんだよ。スピリットの１人だったはずだけど……」

黒夜叉は、ノームを撫でながら答えた。

「スピリット……？」

「知らない？　４大元素は知ってる？」

「火、水、風、地の四つの元素ですよね。でも、関係あるんですか？」

「スピリットは、その四台元素を実体化したものなんだ。サイの強い能力者の元に現れるらしいんだけど。でも何で、オレんとこに来たんだろう？　もっと強い人もいたのにな。あ、スピリットはサイの　能力を吸収して強くなっていくから強い人のとこに現れるらしいよ。もしかすると、蒼のところに来るかもね」

「だといいですけど。自信ないですね」

そうこう言っているうちに、訓練所的なところについた。結構広いし、丈夫そうだ。かなり暴れても大丈夫だろう。ただ、未だに銀介が怒った時の傷が直されていないようだ。ひびの上にクリスタルで補強されている。

「あの……　暴れても、ここ……　こわれませんよね？」

「多分……」

「多分！？」

「銀介を信じよう。さ、武器を出して」

「ハイッ！」
意識を左手に集中させる。左手のひじから青色の半透明なクリスタルに包み込まれていく。そして、剣のようにクリスタルが鋭くなり僕の武器になった。
「リーチは伸びないが、扱いやすいタイプの剣か……」
黒夜叉が、両方の剣を同時に出しながら言った。銀介と戦った時の剣だ。
「じゃあ……　始めるよ」
言い終わると同時に、走りこんできた。

第5話

「速い！！」
とっさに、左手と右手に出した盾で受け止めた。黒夜叉は、受け止められるとすぐに剣をひき、刃を交差させて武器を変えた。今度は、死神なんかが持っていそうな黒い鎌だ。
その鎌を振り上げたとき、僕は無意識に前に出て鎌の持ち手の部分を斬った。カランと、鎌が落ちて黒夜叉が止まった。が、すぐに新しい武器をとりだした。今度は、クナイのような物を6本出だ。
それを片手に3本ずつかまえ、鉤爪のように切りかかってきた。それを避けながら、右手の盾を剣に変えた。光が集まって、ひじから指先まで約1秒で包まれた。右手が剣に変わると同時に、黒夜叉がクナイを投げてきた。
「クッ！！」
両手でクナイを払い落とす。顔を上げると黒夜叉が目の前にいた。クナイに気をとられているうちに近づいていたようだった。ポンと頭を叩かれた。
「すごいよ……　この歳でここまで出来るとなると」
「そ……　そうですか？」
「ああ、これぐらい出来れば……」
不意に補強されていた部分のクリスタルが壁と共に割れた。その割れた壁の後ろに何かがいた。その何かが、羽を羽ばたかせながら入ってきた。
「な……　何だぁ！？」
「似てる……　あの時と」
「は？」
展開が速すぎてついていけない。黒夜叉の隣にいたノームは歌うように短くなき、その隣に青い目の大鷲が降りた。
「キー！！」

大鷲が翼を広げ、鳴いた。大鷲の下から水が吹き上がり大鷲の姿が見えなくなった。しばらくして水が消えると、後ろで縛った綺麗な金髪、さっきの大鷲と同じ青い目をしている、１人の女性が立っていた。
「私はエレメンタルの１人、ウンディーネ」
「エレメンタル！？　じゃあ……」
「あなたの思っている通りです、玄さん」
ウンディーネが近づいてきた。
「おいおい……　ウンディーネ。蒼がついていってねーぞ」
「ノーム。いつの間に、元に」
「さっき」
ぶかぶかのズボンに、黒の半袖、ニット帽という服装でいかにもブレイクダンスなんかをしていそうな感じだ。よく見ると結構カッコイイが、やる気がなさそうな感じのせいでパッと見、かっこよく見えない。
「蒼。まぁ、今知っといた方がこの話ついていけそうな事だけ話しとくからな。まずは、スピリットとエレメンタルの違い。スピリットは、オレらが動物とかの姿になっているとき。エレメンタルは、人型んとき。ああ、サイ使えんのはエレメンタルんときだけだな。違いは他にねーなー」
「ノーム、間違っています。正式には、サイもどきです」
「どっちも同じだろ。あとは契約な。まあ、コレはいわねー方がいいな。ウンディーネが教えてくれると思うぜ。ま、こんぐらいでいいかな。分かんねーことあったら、教えてやるぜ」

第6話

スッと、1人手があがった。蒼だ。
「じゃあ、1ついいですか？何故、何人もいるサイ使いの中から僕が選ばれたんですか」
「まあ、選ばれ方は2つあってな。色別でサイ使いの中のトップが選ばれるか、スピリットがついている人に勝つかだな」
「蒼さんの場合は、トップとして3人の中から選ばれました」
「3人……」
「ですが、強さの度合いは蒼さんが100%だとすると、残りの2人は10%未満です。それと、エレメンタルとの契約のことですが。私と戦ってもらいます」
一瞬、蒼の動きが止まった。
「は？」
「時間が無いんです！！　……いいですか、もう1度言います。私と戦ってもらいます。これは、天空法律109条に定められています」
ウンディーネが懐から分厚い本を取り出し、パラパラとめくり始めた。
「あった……。『第109条　何者かを配下に置くには、戦いで勝利しなければいけない』エレメンタルとの契約も、配下におくことと同じです」
読み終わると、懐にしまった。そして、青い棒を作り出した。
「相手の武器を破壊すれば勝利です。ノーム、審判をお願いします」
「ハイハイ」
「はいは……　はぁ。何回言っても変わらないんですよね、もういいです」
「じゃあ、武器を用意して」
いつもと同じ武器を作り出す。というより、僕はこの武器と盾し

か作れない。
「準備はいいな？　勝負始めっ！」
ウンディーネは、棒をまわしながら上から下におろしたり動かしてる。
「水よ……　強き力を持つ新たなる主を定めよ……　レインフィールド！！」
ウンディーネの周りから、まるで津波のように出た水がぶつかり合って徐々に上に向かっていく。そして、水が上から降り始めた。ジュウと、何かが溶ける音がして左手を見た。
「サイが……　溶けている……」
「この雨は、サイを溶かします。この状況の中で、私の武器を破壊してください。ちなみに、私の武器はサイで無い限り破壊できませんし、サイもどきなので雨の影響を受けません」
「どうすれば……」

第7話

この雨の中で出したサイがもつ時間は、せいぜい2～3秒といったところ。さらに、ウンディーネの周りは超集中豪雨で1秒ももたないだろう。ウンディーネの攻撃は、その1秒で受け止めて跳ね返すしかない。破壊までは出来そうにない。

「水よ……　主にふさわしき者を示せ……　マリンアタック！！」

ウンディーネは、棒を右から左にまっすぐ振った。その直線から巨大な水の球体が凄い数で飛んできた。1発目を右に避けた。が、弾けた滴が服にあたり、あたったところが溶けた。

「酸！？　クッ！」

一瞬でかなりデカイ盾をつくる。自分にも、こんなに力があるなんて驚きだ。だが、近づけば酸と雨にやられサイは使えないだろう。

でも僕は、この戦いに勝たなくてはいけない気がする。そうでもなきゃ、ウンディーネは雨を降らせてすぐにあの棒で、僕の数センチしか残っていない武器を破壊したはずだ。だが、何故僕に契約を求めているのかは謎だ。

「早く勝たないと、溶けますよ」

「！！　服が……」

雨まで、酸化し始めた。早く決着をつけないと大変なことになる。もしかして、サイが溶ける効果は消えているかもしれない。そう思って、試しにサイを使ってみる。思ったとおりだった。サイは溶けない。上と前に盾のようなものを作りながら、近づいていく。が、ウンディーネの周りの集中豪雨地帯に入るとサイが溶け始めた。

「っ！」

サイが溶ける効果のある酸性雨が降っていた。肌まで酸で火傷のような感じになっている。だが、サイが溶ける効果は少なくなっているようだ。

「そうか、こうすれば良かったんだ！！」

上に盾を作る。ウンディーネは、棒を構えた。
「無駄です」
「無駄じゃ、無いよ」
左手の盾と同時に作った剣で、ウンディーネの武器を斬り刻んだ。
カランと武器の破片が落ちる音の後、雨と水の球体の攻撃が已んだ。
「勝負終了。蒼の勝ち」
「勝った……」
「やったな、蒼」
「はい！」

第7話（後書き）

蒼「てか、7話目で最強の称号って……」
ノ「いーの。作者だって、投稿してから「何か物語り進むの速過ぎね？」ってな言ってたし。しかも、何か蒼の性格変わっちゃってるし」
蒼「あ、ホントだ」
ノ「ま、作者の得意な性格は『アリスと幻と』のアリスみたいなオレ様系だし、しょうがなくね？」
蒼「なに、告知（？）してんですか！？」
ノ「ま、いいってことで。それよりも……」
蒼＆ａｍｐ；ノ「意味不明なものしか書けない（しかも常識の無い）作者の作品を見てくださった方々、ありがとうございます。そして、いろいろとすみません！！」

作「次からは、蒼の初任務・学生生活の話に移ります。そして、長いあとがきすみません」

第8話

「え……」
「だから、私も学校へ行くことになるのでさすがにこの名前じゃ怪しまれるので、偽名を考えてくださいといっているのです」
ウンディーネ（エレメンタル・スピリット）に勝つ＝最強の称号の様なものを手に入れたも同然で、僕はヒカリのカケラを手に入れる任務を始めて頼まれたと、同時に学校へ行くことになった。
その学校の校長は、元サイ使い。つまり、サイのことを知っている人で、とりあえずある程度はサイのことがばれても大丈夫（らしい）。場所がいまいち分からなくて、今の今まで学校に行ってなかったというか、行けなかった。
一応、白阿修羅に勉強は教えてもらっていたから大丈夫だと思うが、それよりも心配なのは、このウンディーネのことだ。今、（銀介さんに）呼び出されて行ってみるとウンディーネに、
「私も学校へ行くことになるのでさすがにこの名前じゃ怪しまれるので、偽名を考えてください」
と言われ、今に至る。
「行き成り偽名を考えろって言われても……。それに」
「あ、姿の方は大丈夫です。自由自在なので」
「はぁ……」
とりあえず、思いつくだけ書いてみる。
「やっぱりコレですかねぇ」
「う～ん……　やっぱりコレだろ……」
「って、候補あるのかよ！！　てか……はぁ。突っ込む気がなくなってきた……」
「で、どうする？　名字は決まったから、名前を決めないとな」
「コレ……　どうですか？」
さっきの紙を見せてみる。僕が書いたものを全部見つめてから何

かを決めたように頷いた。
「いいな、コレ。ありがとう、蒼。じゃあ、この名前で連絡しとくよ」
「……」
「ん……。どうした？　蒼」
「それだけ……　ですか？」
「それだけ。部屋に戻ってもいいよ。……あ、制服？　それは、まだ届いてないけど」
「い……　いえ。し……　失礼します……」

第9話

「別に、仕事の話をしてもいいと思うんだけどな」
ベットの上に寝そべりながらため息をついていると、足音が聞こえた。そして、ドンッと扉が壁にひびが入りそうなくらいの勢いで開いた。
「先輩、銀介さんに呼ばれてるガ」
「……ガ？」
見かけない顔。……と、個性的な口癖。服装は、ＣＯＬＯＲの制服ではなく私服。新人だろうか？

「ゴメンねぇ。ついでに言っておけばよかったね、仕事の詳しい情報。ヒカリのカケラを探す……　っていうのが大雑把に言った仕事なんだけど、そのカケラがどこにあるかまでは分かっているんだ。ただ、そのある場所っていうのがね。今回の場合は、怪物（モンスター）の中核なんだ」
銀介は思いっきり笑いながら普通に怪物の中核と言い、周りのメンバーは時間が止まった。
「？　どうした？」
「い……　いや。なんでもないです。で、その中核に行くにはどうすれば、いいんですか？」
「もちろん、怪物（モンスター）を倒すんだよ。で、１人じゃ大変だろうと思ってさ、ギアと一緒に行ってもらおうと思ってるんだけど……」
「ギアって、だれですか？」
「ああ、紹介がまだだったね。さっき、蒼を呼びに行ってもらったんだ。彼はいろいろとあって、ＣＯＬＯＲよりも大規模な集団の……　何だっけ？」
「キボウですガ」
「そうそう、キボウ。そこから配属されたんだ。今、１８だからサ

イ使いとして仕事を始めて、２年になる。色は、黄色。サイ以外にも能力を持っているらしいけど、今は話せないな。実戦には慣れてるっていっていたし、大丈夫だと思うよ。」

第１０話

（銀介さんが大丈夫って言って大丈夫だった記憶が無いんですけど……）

「で銀介さん、怪物（モンスター）の居場所って何処ですガ？」

仕事の話に流れを戻す。

「え～～～と……　あった」

机の上から地図を探し出し、机の上に広げる。そして、トントンと人差し指で地図の上を叩いた。

「ここ」

「う……　海？」

「ま、一般の地図の場合はね」

銀介が叩いた場所は、日本から南。つまり下の方にある海。

「ここはね、１つの大陸があるんだ。いつもは、ループの魔法がかかっていて普通の人はすりめけてしまうだけなんだ。でも、ここに怪物（モンスター）があらわれてね。その種族は、魔法系のものには触れれない種のはずだった。でも、コイツは、ループを破壊したんだ。ありえない力を持ったということは、ヒカリのカケラを体内に取り込んだ可能性が高い」

「！！　だからか……」

ちょっと大きめのビー玉のようなガラス玉を銀介が取り出し机の上におき少しだけサイを発動した。ダイヤモンドダストのようにキラキラと光を反射するサイがガラス玉の周りに集まり、ガラス玉から上に映像が出る。

「これが、今回のターゲットだよ。スピリット・改……　だったかな」

「改！？　生物なのに名前に改が入っているんですか！！」

銀介さんと、ギアがうなずきあっている。

「この類には、よくあるよな」

「よくあるガ」
「ええ！？」
「まあまあ。で、これがヒカリのカケラ。２人とも見たこと無いだろう？」
銀介が、不思議な光を発する羽のような物を持っている。
「物によって形は違うけど、この発光は変わらないから。ま、微妙にグロイのもあるけど……」
「ヴア！！」
ぬっと、懐から目玉のようなヒカリのカケラを取り出した。そして、その目はまるで生きているように動いている。
「うううううう、動いたぁ～！！」
「動いたガァ！！」
「そりゃ動くさ、生きてるんだし」
「ええ！！」
「ま、それより一刻も早くスピリット・改くんを倒してきてねぇ～。じゃ、逝って……　あ、間違えた。行って……　らっ……　しゃーーい！！」
最後の最後に、銀介に蹴られて移動用のワープ装置に頭から突っ込んだ。ギアも、僕の上にドサッと落ち、扉が閉まり装置内が発光し始めた。ヒカリのカケラのような暖かい光だ。そうだ、このＣＯＬＯＲ本部のエネルギーは浮遊用とはいえ約８０％ぐらいヒカリのカケラがまかなっていると聞いたことがある。
もしかすると、このワープ装置にも使われているのかもしれない。そんなことを考えている間にワープが終わっていた。だが、ギアが僕の上から動かない。よくよく見ると失神している。うまく当たりすぎたのかもしれない……　蹴り鬼（銀介の昔のあだな）の跳び蹴りが。
「おきてください……ギアさ～ん」
「歯車が５７コ……歯車が５８コ……あ、先輩……すんません。きれいな歯車畑とオイルの河がながれてて……」

「どんな天国ですか！？」
ギアが起き上がり、クルッと向き直った。
「あの……　唐突ですけど敬語、止めてもらえませんガ？　先輩に敬語使われるって、何か変な感じがするんですガ」
「え……　そうですか？でも、ギアさんの方が年上ですから……」
「だから、お互い様ってことでお互いにタメ口ってことで」
「そ、それならいいですけど……。あ、癖になっちゃってるみたいです」
「ま、それならいいガ」
そのやり取りの後、地面が揺れた。
「何だ！？　つーかココどこガ！？」
「今さらぁ！？　僕もだけどぉー！」
とりあえず、状況確認だ。外に出てみると、目の前には機械と植物が共存していた。
「ここは……？」
「多分、ムー大陸の五番角かな。機械と植物の共存を見ると」
「何で分かるんですか？」
「オレ、ムー大陸出身何だガ。４番角の。でも、やっぱり五番角の機械はやっぱいいガァ。この樹は、銀かな？　でも、質が少し劣るガ。じゃあ、白金ガ？」
ギアは、もの凄くはしゃぎまくっている。
（ギアさんって……　いったい……　ナニモノ？）
「どうしたガ？」
「い……いや何……も……」
「どうした……ん？　ッ……！！」
行き成り、標的に遭遇。いったいどうなる！？　僕達！！

第11話

「まさか……　ねぇ……」
「しょっぱなから出会うなんて……　夢ですよね？　コレ」
トカゲのような体だが、ヒカリのカケラのような不思議な黄緑色の光を発している。かなり大きく恐竜のように思える。幸運なことに、向こうはこっちに気づいていないようだ。
「ギアさん。こっちに気づいていないみたいです」
「ああ、やっぱ先手……　必勝だろうガァ！！」
そう叫ぶと、素早くとびだした。……奇襲の意味がない。
「いっけぇーーーー！！」
パーのように、指を広げたギアさんの手の甲には大きな手裏剣のような物ができていた。両手の黄色の手裏剣を構えると、高速で回転し始めた。そして、そのまま怪物を斬った。斬ったところから、ヒカリのカケラのような光が漏れていた。
「っしゃあ！！」
「すごい……　一撃で……　なぜ分かったんですか？」
「勘！　……ほら、持って行くガ」
ギアさんが、ヒカリのカケラを持って去ろうとするとどこからか声が聞こえた。
「あーあ、ボクのオモチャ。まーた、壊れちゃった。どうしてくれるの？　これ」
ペロペロキャンディーのような棒つきの飴をなめている少年が木の上に座っていた。
「何者ガ？」
「キミ達は知らなくてもいいことだよ」
そう言い放つと、スッと僕たちに飴を向けた。
「そんなことよりさ、それ。返してくれない？　また1から創り直さなきゃいけないし。光角（こうかく）って、力が強いモノだからあげるワケに

はいかないんだよね」

第12話

「こう……　かく……？」
「そ、光角。返してくれないんだったら……　痛い目あっても知らないよ」
「渡せないガ！！」
「そうかじゃあ、しかたないね。おいで」

ノックする音がして、扉が開いた。
「銀介。実験室の鍵、貸してほしいんだけど」
「ああ、白狐。どうしてまた」
「ちょっと気になることがあって」
「気になること？」
「これを見て。ここ」
渡された書類には、ヒカリのカケラについて書かれていた。指差された部分の文字は、「特殊能力・アリ」。
「大方、銀介の予想通りだった。こっちの2つも見て」
今度は、「特殊能力・ナシ」。それと、「特殊能力・―」。
「なんだ？この横線は？」
「それはね、実験した後に能力の詳細を調べるためにもう1度実験したの。でも、能力が発動しなかった。実験の間に変わったことといえば、他の……　似た形をした、ヒカリのカケラがこのカケラから離れたことぐらい。もしかすると、あるカケラとあるカケラが近くにあると能力が発動するのでは？　っていう確率があってね。わからないから、この表示にしたの」
「そういうことか。こういうことは、思いっきり追求してもらいたいね。はい」
机の引き出しを開けて、小さな鍵を取り出した。その鍵を白阿修羅に渡した。

「……！　後ろっ！？」
振り向く隙もなく、鋭い一撃がヒットした。何かの爪だったのか、服が破けている。
「ボクは、直接手を出さない。一撃で、勝負が決まってつまらナイから」
「こんの野郎！！　なめやがって！　ゼッテー負けないガ！！」
ギアさんが拳を額の前にちょうど刃がぶつからないように構え、勢い良く振り下ろした。
「カラーチェーンソー・ソル、始動！！」
そう叫ぶと手裏剣の４枚だった刃が８枚になり手裏剣自体も大きくなった。ニヤッと笑うと、すごい勢いでさらに高速で回転し始めた。もう、刃が早すぎて中心の部分しか見えない。
「これで……　どうだっ！！」
両手を振ると、手裏剣がすごい速度で木の上の敵に向かっていった。打ち出した反動で、左腕の破れた袖が地面に落ちた。その腕はものすごい数のいれずみで埋め尽くされていた。
「！！　ふ～ん……。キミのその腕……　ギアだね？」
「なぜ知っているガ！？」
「さあ？　知りたければ……　このコを倒してみな！！」

第１３話

「そうか……　こいつがさっきオレを引っかきやがった奴だガ？」
少年の座っていた木が姿を変えた。鱗に覆われた体。巨大なトカゲか、恐竜のような姿だった。
「馬鹿ダな。こいつ以外、いないだろ？」
「コレがお決まりダガ！！」
「ま……　いいか……　でも、早くしないとこのコ、キミを食らうヨ？　さっきもさっきで、キミ必殺技はずしちゃったみたいだし」
あからさまな、ロリキャラ（＋ぶりっ子）ポーズ。いったい何歳なんだ？という疑問がわきあがる。
「ふ……　わざとさ……　なんて、古い台詞言ってみたり。でも、そんな余裕があるのもあの必殺技があるからだけどガ」
「はぁ？　さっき外したダろ？」
さぁ？とギアが首をかしげる。教えるつもりはなさそうだ。
「ギアさん！！　早く何かしないと、やばいです！！」
「大丈夫だって！　ほら、来たガ」
そういって、敵の後ろを見つめた。確かに何かがこっちに向かって来ている。
「そんなの来るまで待てませんよ！！　こうなったら……」
武器を作ろうとした僕を止めた。
「大丈夫ガ」
そう一言言うと、ニヤッと笑った。
「さっきから、ごちゃごちゃうるさいんだよ！！　そろそろ消えてもらうヨ」
少年が片手を上げると、すごい速さで巨大トカゲが迫ってきた。
「……　動かなければ、致命傷にはならなかったのに……」
ギアさんがそっとそうつぶやいた。その直後に、戻ってきたカラーチェーンソーが巨大トカゲを切り裂いた。巨大トカゲは光となっ

て消えた。
「さあ、倒したガ」
「……しょうがない……　これでほかの人たちに僕らのこと知られても困るしネ……」
少年が懐から仮面を取り出した。
「おいで。僕が本気で戦ってあげるよ」
「その仮面は！！　おまえ……　もしかして……！」

第１３話（後書き）

すいません。かなり遅れました。新年１発目が、３月手前になりました。これからは頑張ります。すみませんでした！！

第１４話

「もしかしてって、知り合い……　ですか？」
少年のほうから殺気が、風となって斬りつけてくる。
「蒼、ワープ装置のところへ走れ。あいつは……　あいつは……」
何回も戦闘を経験したギアが震えている。
「あいつは、オレ……　いや、ＣＯＬＯＲのメンバー全員が束になっても……　敵わないガ……」
「そんな強敵が、居るはず……　無いのに……」

ところ変わって、ＣＯＬＯＲ本部。
「銀介さん」
「ん？　ウンディーネか？　何か用か？」
ウンディーネが銀介に歩み寄った。そして、
「何で、私に何も言わずに蒼を仕事に行かせたんですか？」
と、かなりのオーラを出しながら言った。
「あ、言い忘れてた。あっはっはっはっ！」
「……ちっ、能天気野郎め……」
「はっはっ……え？」

「どうしタ？　こないノ？」
シンプルだがどこか特徴的な仮面をつけ、じりじりと武器を手に歩み寄ってくる。
「ギアさん、先に行っていてください。少し、時間を稼ぎますから」
「いや、オレが……残る。本気出すガ！」
「でも」
ふわっと、ギアを中心になぜか地面のほうから風が吹いてくる。
「本気なら……」
「こないのなら、こっちから行くヨ」

「なっ！」
物凄い速度で、向こうから迫ってきた。武器を出すのも間にあいそうに無い。もうだめだと身構えたとき、後ろのワープ装置のあたりから青色の棒が飛んできた。
「早くこちらへ！！　早く！！」
この声は、ウンディーネ。助けに来てくれたようだ。
「ギアさん、行きましょう」
ギアの手を引っ張り、ワープ装置に向かって駆け出す。逃げる間、ウンディーネが援護してくれた。ワープ装置に駆け込むと同時に装置の扉が閉まった。
「大丈夫でしたか？」
「あ、ありがとう。たすかったよ」
「間に合ってよかった」
「でも、どうしてここに？」
「私に黙って任務に行かせたから、銀介さんを数発ぼこって援護に。場所なら、大体分かりますから」
（数発ぼこって……）
ウンディーネを怒らせてはいけないと思った、ギアと蒼でした。

第15話

「……で、その多重人格者のマックスとか言うのが、ヒカリのカケラのことを光角と言っていた。そして、戦いを挑んできた。って、ことでいいのかな？」
「まぁ、大体は……ですガ」
ボコボコにされて顔がすごくはれている銀介に、大体の事情を話した。
「マックスは、1つの人格でいるために常に仮面をつけていました。その仮面が、戦闘の時につけていた仮面と同じものでしたガ」
「その……　マックスさんは、ほかの人格になったことがあるんですか？」
ギアは、ちょっと考えてから口を開いた。
「確か、1度だけ。オレが、大怪我を負って動けなかったときガ。後から聞いたことだガ、いきなり仮面が砕け散って暴走したらしいガ。手がつけれなくなって、殺されたとか。殺される直前に『僕はポーン。無限の可能性を秘めた兵士（こまま）』と、名乗ったらしいガ」
「その人格だけが……　生き残ったか……」
「そ、そんな事もあるんですか！？」
「あの……　ちょっといいですか？」
ウンディーネのちょっと怒っているような感じの声が聞こえる。
「何？」
「こんなシリアスな話をしているのに……何故、ＢＧＭは流星☆ハ▽◆○どか※@$%ー！！」
思わず、沈黙が流れる。沈黙を破ったのは銀介だ。
「へー。ウンディーネって、活舌悪かったんだ」
「うん。1つ目の曲名も後半言えてなかったしね。わかる人にしかわからないよ」
「だっまれぇーいっ！！」

顔を真っ赤にしながら、ウンディーネは叫んだ。（吠えた？）
「はずくねぇのかよ……」
「はずいわー！！　ボケー！！」
「えぇー！！」

「とりあえず、さっきの話に戻ろうか」
優雅に紅茶を飲んでいる白阿修羅と、ウンディーネ以外の皆は頭にたんこぶを作りながら今後の作戦のためにミィーティングに参加した。

第１６話

「バナナの皮で転んだ隙に総攻撃って感じの作戦で、どうかな？」
「う～ん……　やっぱり、無理が無いですか？」
銀介は、色々と敵に対する作戦を言ってみた。が、全部却下された。個人的には、自信のある作戦らしいが。
「そうかなぁ？　エリーは、どう思う？」
「大丈夫じゃない？　ギリギリね」
「いやっ、無理ですよ！引っかかりませんよ、普通は。……あれ」
そこには、薄い黄緑色の髪をバンダナで留め、紅色（あかいろ）の瞳をどこかにそらしながらいかにも興味が無いといった素振りを見せた人物が居た。ミィーティングから参加したようだ。
「エ、エリーさん！！　まさか、厨房から出てこられるとは」
「あら、私だって戦うわよ」
そういって、フライパンを構える。エリーこと、エリザベス・ケイシーはＣＯＬＯＲ本部のコックである。緑のサイの使い手らしい。女性のわりに服とかに興味が無いようで、ジャージの上下と男っぽいスニーカーが私服のようだ。
「むしろ、戦いの方が……好」
「と言うより、作戦なし作戦の方が戦いやすいと思うけど……」
「おれ、そっちにさんせーい」
今日は、機嫌がいいのかノームはよくしゃべる。それに対して、ウンディーネはさっきのことが相当恥ずかしかったと見える。
「私も、作戦はいらないと思う」
「ぼくも」
「……同じく……」
黒夜叉の意見に白阿修羅と蒼、テンションの低いウンディーネも賛成する。

「じゃあ、この作戦会議の時間はなんだったんだ！？」
銀介は、机を叩きつつ勢いよく立ち上がった。
（どっちみち無駄だったんじゃ……）
銀介以外、みんなの思いがシンクロした瞬間でした。

第17話

「まあ、とりあえず任務に出るときはどんなに簡単でも最低2人で出るとか方法あるでしょ？」
この状態で、エリーさんが口を開いた。
「それでいっか。じゃ、ミーティング終了！」
皆が帰ろうとしたときに、思い出したように銀介さんが口を開いた。
「あ、ウンディーネと蒼。制服が届いたから、取りに来てくれ」

「はい、これ」
渡されたのは、学ランと名札。ウンディーネは、普通に紺色のセーラー服だ。
「着てみたら？　慣れといたほうが良いし」
「そうですね。着替えてきます」

着てみた感想は、動きにくい。ウンディーネは？と、周りを見渡したがいない。この部屋に、入っていった人のスカートがセーラー服のものだったような気がするが。
「やっぱり、似合いますね。さすが、１４歳！」
「ウ、ウンディーネさん！？」
「なぁに？　その反応？」
目の前にセーラー服の人がいた。金髪で、きれいな透き通るような青い目をしている。特徴的にも声的にもウンディーネそのものだ。だが、明らかに違う。前は１８歳以上にしか見えないルックスだったが、今は逆に１２歳ぐらいに見える。
「私の１４のときの姿です。言ったでしょう？　姿はどうにでもできるって」
「確かに、前に聞いたような……」

「オレだってエレメンタルだから、姿を変えれっぞ。ほら」
ポンッと、まるで漫画やアニメのような音とともに煙がノームを包んだ。煙が薄れると１０歳前後の少年が立っていた。
「なっ」
それだけ言うと、再び煙に包まれ元の姿に戻った。
「さてと……　あ、教科書。さっき、２人が来る前に銀介がそこに置いていったな」
「たしか、『運んどいて』って、それだけ言い残してたような。……手伝おうか……？」
「……お願いします」

第１８話

「なんか……　教科書多くない？　１０教科だよね？」
「……の、はずなんですけど……。３０冊はあるような……」
部屋に運んだが、机の上は教科書に埋まった。
「実技教科とかに、２教科で１教科っていうのもあるガ。ワークの量とかも考えれば、普通と思うガ」
「なるほど」
「そ……　そうなの！？」
納得した僕。その横で１人驚く黒夜叉。
「鞄はかなり重くなるガ。頑張るガ、蒼！」

次の日。
「えっと。皆さん始めまして。虹崎　蒼と言います。よろしくお願いします」
「私は、水知（みずち）　愛（まな）といいます。よろしくお願いします」
「みんな、水知さん、虹崎君と仲良（なかよ）」
先生の声を遮るように１生徒の声が聞こえた。
「オッス！　オレ、きゅーびって言うんだ。ここに来たって事は能力者だろ？　何色のサイ？」
「私は青」
「僕も青色。君は？」
先生が話しに入ろうとしているが、入るタイミングが分からず悩んでいる様子が視界の隅に映る。
「赤！　よろしくな！　蒼、愛！　うぉぅっと」
「ちょ、九火！　気をつけてよ！」
「わ、悪ぃ」
九火が奇声を発したときに、右腕のほうからスルリと山椒魚（さんしょううお）が出てきた。落ちそうになっていたが、九火につかまれて難を逃れた。

右側の女子が「だからこいつの隣はいやなのよ……」とか、ブツブツ文句を言っている。
（！？　山椒魚！？　そして、赤色のサイ……　もしかして）
「さ、山椒魚つれてきてるんだ……」
「こいつ、ちょっと特殊でね。おいて行こうとしても、ついて来るって言うか、先回りして学校にいるから、特別許可おりちゃってるんだ」
「へー、なんかすごいね（棒読み）。ま、私だったら怖くて攻撃してるだろうけど」
「！？」
最後に口元だけ笑みを浮かべながら、ぼそっと言い放った言葉に山椒魚は震えだした。
「……どうした？　顔芸なんかして？　サラマンダー？」
その名前を聞いたウンディーネは思わず鋭い目になった。が、すぐさまその表情を元に戻した。その時間は誰にも気づかれないほど一瞬だった。ただ1人、サラマンダーを除いて。

第１９話

「はぁ。疲れた」
前の席に座っている九火を見た。６時間目（最後の授業）の途中（といっても、開始１０分ぐらい）から眠り続けている。
「ＺＺＺ……　ブツブツ……」
「？　寝言？」
「ＺＺＺ……　セリャフィミュ……」
セリャフィミュ？　熾天使（セラフィム）の事か？　それにしても……
「セラフィムが出てくる夢って、いったいどんなんだろう？」
考えていると、とんとんと背中をたたかれた。振り返ると、ウンディーネだった。
「蒼、銀介にちょっと遅くなるって言っといて。お願いね」

放課後

ウンディーネは、校舎の屋根の上にいた。
「遅い……　サラマンダー」
足音もなく後ろから近づいてきた気配の主に、振り返らずに言った。
「悪（わり）ぃ」
その返事を聞き、本題に入る。
「さっきの様子じゃ、主に正体を明かしてはいないようね。なぜなの？」
「あいつは、単純（バカ）だからな。自惚（うぬぼ）れてしまう。そして、未来を知りたがる。お前だって、すべてを教えたわけではないだろう？　偽（いつわ）りでつなぎ合わせている。特に、あいつは呪われる運命だからな」
「そうね……　でも、もう遅いのかもしれない。私に肩代わりでき

るのかしら……」
後ろを向きサラマンダーは、歩きながら言った。
「『運命は自分が選んでいくもの』お前が言った言葉だろ？　いい選択をすれば済む話じゃないか。じゃあな。そろそろ行かねーと、九火がおきちまう」
ひらひらと手を振り、サラマンダーは屋上から飛び降りた。

第２０話

「ん。ふぁ～あ。……あ！！」
九火は目を覚ました。ほとんどの人が部活か帰宅した後だった。
「やべっ！　また、６時間目寝ちまった」
「遅いお目覚めだな、九火？」
九火の目の前には、ちょっと濃い水色の衣装で赤い帯をしめた天狗の格好をした男が立っていた。
「また、お前か。何、今度は天狗？　この前は、狐面だったか？　なぜ、素顔を隠すんだ？」
「これで、期限は過ぎた。お前は、覚えているか？　俺を？」
天狗の面をとり、男は言った。仮面の下は、比較的整った顔立ちだった。が、変わった化粧をしている。鼻筋を強調する線とまぶたの上に目じりのあたりが跳ねた線が紅色で引かれている。
「……ああ、覚えているとも。この前、いきなり戦いを挑んできたよな？」
「覚えているようだな……。約束だ。教えよう、我らスピリットについて」
「スピリット？」

数日後

「おはよう、九火。学校来るの早いね」
「おはよっ！　蒼。お前もいつもより早いじゃん？」
教室の中にいるのは九火と蒼だけだ。
「ほら、今日は１時間目って“サイ能力テスト”って書いてありましたから。どういうのかよく解らなかったから、誰かに聞こうと思って」

「簡単だよ。１０秒でどれくらいの大きさの球体を作り出せるかっていうのと、どれぐらい正確に造形できるかの２つ。ちなみに、前回の造形物は『馬』だった。今回も動物だと思うよ」
「動物かぁ。動物といってもいっぱい種類あるし……」

そして、１時間目……。
「はい。じゃあ、テスト始めるわね。まずは、１０秒で球体を作るやつね。出席番号順に７人づつ５列に並んで……」

第２１話

ぞろぞろと、みんな並び始めた。
「えっと、蒼君と愛さんは最後の列に並んで。これでみんな、並べたね？」
先生が、前のほうに走っていく。前にたどり着くと、声を張り上げた。
「準備は、いいねー？　よーい、始め！！」
掛け声とともに、意識を集中して球体を作り上げる。
「５・４・３」
残り５秒を切った。出来ている球体は、直径５センチくらいだ。
「２・１！」
最後の最後に、もっと集中する。
「０！！　そこまで！」
終わりを告げる合図が聞こえる。その前には、直径３０センチぐらいの球体が浮かんでいた。
「すげ……」
隣にいた男子の口から、そう言葉がこぼれた。みんなの作った球体は、１５～２０センチぐらいがほとんどだ。その男子の言葉がきっかけだったように、ざわめきが起こった。
「すごいわね……。最初……　しかも転入２日目で」
先生の、そんなつぶやきまで聞こえた。実際、なんだかいつもと違う感じだった。最後に爆発的にサイが発動したような感じだ。

「って、感じですごかった」
紅茶を飲みながらウンディーネは本部の食堂で、エリーに話していた。

「本当にその後のテストも、なかなかでしたよ」
「彼、やっぱり凄い潜在能力をひめていたのね。ふふふ、あの子も早く会ってみたいって言ってるわ。その、『天空界の守護神（ホーリーフィールズガーディアン）』にね」
「でも、無理なんでしょ？　あの子はまだ」
珍しくウンディーネがタメ口で話している。そして、いつもは無口なエリーも良く喋っている。
「ええ……。まだ、精神体（こころ）を保っているのが限度みたい……」
エリーは、悲しそうな顔で答えた。

第２１話（後書き）

皆さーん、あけましておめでとうございまーす！！
……もう、３月だって？
……すいません。なかなか、続きが思い浮かばなくて……。
でも、今はだいじょうぶです！！
これからはバンバン更新していきますよー！！（気持ちだけでも）
それでは。

第２２話

「蒼、これ着てみてくれガ！！」
あのテストの日以来、特に何もなく、時が経ちました。季節は、春。いろいろな事に挑戦する人が増える季節っぽいです。
「こ、これは……？」
ギアから渡されたのは、ニット帽とヘッドホン。それと、ジーパンと膝上までありそうなＴシャツ。
「お？　水無月（みなづき）のコス？」
ひょっこりと現れたのは、黒夜叉。
「そうガ。やっぱり、青髪といえば鈴暮（すずくれ）さんしかいないガ！」
「やっぱ？　でも、オレは式典バージョンのドレスのほうがいいなぁ」
「そんなのあったガ？」
「ああ……。えっと、確か」
なんだか、話がマニアックなほうに進んでいる。
「大変ねぇ……　オタクって」
白い髪の白阿修羅が現れた。今日は、ツインテールではなく髪を下ろしている。
「これ、ギアの手作りでしょ？　染めるインクとか絵の具みたいなの買ってたしね」
綺麗な白い髪がさらっと落ちてくる。改めて思う。
（髪の毛、長いし綺麗だな）
「あ、白狐。ちょうど良かった」
白阿修羅に気づいた、黒夜叉が「こっちに来い」とでも言うように手招きする。
「何だよ？　玄」
近づいていった白阿修羅に服を渡すギアと黒夜叉。
「着てみ？　似合うから」

ワンピースとスカート。ワンピースには所々はみ出している、ギアの手描きと思われる模様。蒼が渡されたものに描いてあったものと似ている。

「やっぱり、梅初(うめはつ)さんしかいないガ！！」

目を輝かせているギアの横で、白阿修羅はわなわなと体を震わせている。

「コスプレなんかするかーー！！」

「ぎゃぁぁぁ！」

白阿修羅が吼えた。……その後、ギアと黒夜叉を（彼らの部屋以外で）見たものは居ない。

第２２話（後書き）

そろそろ、名前変えようかなぁ……。なんて考えている、今日この頃です。

“みてみん”に、変える予定の名前で登録したもんで。へへ。

まぁ、絵とか上手くないんですけどね。“好き”と“得意”は違いますから（言い訳）。

気づいたら変わってるかもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

追記）本文で、コスってくれなかったあの方に別衣装でコスプレってもらいました。テストついでに、入れてみます。（本文改良に伴い現在は非表示にしました）

第２３話

「皆さんは、コスプレ事件を覚えているだろうか？　そう、あの――」
「なにブツブツ言ってんだよ、玄？」
「玄ー！　白狐ー！　食べ終わったら、蒼にサイの使い方教えてやってくれ」
ここは本部内の食堂。暗いオーラをまといつつ、うどんを食べているのは黒夜叉。その近くの席から突っ込んだのは白阿修羅。そして、入り口近くから叫んだのは銀介。
「……聞いてるのか、玄？」
虚ろな目をしながらうどんを食べる彼には声が届いてないようだ。
「銀。無理だ。“いつもの”で喝入れてくれ、こいつに」
「……良いのか？」
銀介は周りの人に許可を取るように見渡す。その場にいるエリーが頷（うなづ）き、耳をふさいだ。白阿修羅も同じように耳をふさぐ。
「じゃぁ……。すぅぅぅ（息を吸う音）……。ヴォォォォォォォォォォォォイ！」
黒夜叉の耳元で、大音量のデスヴォイスが炸裂した。ワンテンポ遅れて黒夜叉が意識を戻す。
「っ！　……あれ、食堂？」
「玄。食べ終わったら、白狐と一緒に蒼にサイの使い方教えてやってくれないか？」
「おう」

「蒼、お前はサイの能力をどこまで使ってる？」
「えっと、形を作るぐらいなら」
そういいながら、サイを使って球体を作ってみる。
「なかなか綺麗に作れてるな……。よし、コレなら。いくぞ、白狐」

「ああ」
二人が意識を集中しサイを使う。まだ形になっていない粒子状のサイが混ざり合う。そのまま、サイが固まり球体へと仕上がった。
その球体の色は――
「――灰色……」

第２３話（後書き）

長い間更新してませんでした。部活もいそがしく、絵ばっかり描いていました。

……この、めんどくさがりメェ！ってな感じです。がんばっていきます、これからも（倒置法？）。……あ、ちなみに銀介は裏設定では、過去にデスメタルとかそのあたりのバンドを組んでいた経験があるようです。それでは。

第２４話

「コレは、色を“クロスオーバー”させたんだ」
そういって、黒夜叉は目の前に灰色の球体を動かす。
「蒼、お前くらいなら簡単にできるよ。きっとね。やってみようか？」
白阿修羅が粒子状のサイを出す。そのサイは、同じところをぐるぐると回っている。
「同じところに、サイを出してみて」
「はい」
白のサイが回っているところに、青いサイを混ぜていく。
「そろそろいいかな？　球体に仕上げるよ？」
白阿修羅の声とともに、広がっていたサイが一箇所に集まりだす。
そして――
「できた……」
水色の球体が目の前に浮かんでいる。
「ね、簡単だったでしょ？」
「まぁ。コレはな」
「なんで、あんたが答えんの？」
「まぁ、いいじゃん。次は、固定についてだな」
黒夜叉が、言い終わると同時に蒼の両足首にサイを使う。
「え？」
「蒼、右足を動かしてみろ」
言われた通り動かしてみる。別に、変わったところはない。足首のサイは、そのまま足についてくる。
「次、左足」
今度は左足を動かしてみる。……が、動かない。動かそうにもサイはそこに固定されていて、動かせなかった。
「え、うそ」

何回挑戦しようが、結果は変わらない。
「コレが、固定の違い。物体に固定するか、空間に固定するかで違うんだ。物体に固定するのは無意識でもできるけど、空間に固定するのは意識してすることとちょっとしたコツがいるんだ。あと――」
いきなり、左足が自由になりバランスを崩す。右足は自由なままでよかった、と思ったとたん右足は空中に固定された。
「こんな風に切り替えることもできる」
ちょっとニヤニヤしながら、黒夜叉はサイを操って蒼の右足を空中から下ろした。

第２５話

「まあ、やってみるといいよ」
黒夜叉は、ボールをポンと投げてきた。ボールに溝が入っている。
「そこの溝にサイを使って、跳ねさせたら空中で切り替えるんだ」
「空中で……　ですか？」
サイを使って、溝を埋める。あまり跳ねそうに無いボールを、ちょうどいい高さに跳ねるように投げる。
意識を集中する。目を閉じているのに、ボールだけははっきりと見える。スロー再生のような感じで落ちていくのが分かる。「留まれ」と意識を集中する。

パキンと音がした。目を開けると、ボールが重力に逆らっていた。ちょうど目の前に浮いている。
「すごっ！？　１回目でできるって……」
「もしかして、記憶なくす前にできてたとか……？」
白阿修羅と黒夜叉は驚いた。すぐに黒夜叉が理由を解明しようと考え始める。
「確かに、出来ていたことをするっていう感覚に近いものがありました」
サイを使ってみる。今までの記憶と感覚が違う。今の練習で、何かが開放されたような感覚。そして、知っているわけではないが頭の中をよぎった言葉。
『天空界（ホーリーフィールド）。第零番隊。――虹のサイ』
「虹のサイ……」
思わずつぶやいてしまった。なぜかその言葉だけが、頭から離れない。なぜだろうと思いつつも考える暇はなく、サイを消しボール

を回収した。黒夜叉の「行くぞ」という声に呼ばれ、その場を立ち去った。　――ボールのサイの色が藍色だったことにも気づかずに。

ところ変わって、とある建物内。

「お帰り、ポーン」

「ただいま戻りました……」

「もしかして、逃げられたの？」

いきなり、核心を衝かれたポーンは返事に困った。聞いてきたのはある意味、メンバー内で一番温厚なビショップで良かったと、ポーンは思った。

「あたし的には、しょうがないと思うよ。だって相手は、王（ボス）のライバルでしょう？　『天空界の守護神（ホーリーフィールズガーディアン）』って、言われてたんだっけ？」

ポーンは、こくんとうなづいた。

「しょうがないもんね。ボスにはあたしから言っておいてあげるよ」

そういって、ビショップは“ボス”のところへ歩いていった。

第２６話

「蒼、また仕事を頼みたいんだけど」
「はい？」

今回は、すごく深い森に行くことになりました。１本の大樹にヒカリのカケラがあるらしい。上空から偶然見えただけで、ハッキリとした場所は分からないが。
「で、今回一緒に行くメンバーなんだけどさ……。みんな出払ってね……。一緒に行くのは」
ここで銀介は１度ふっと力を抜き、息を吸った。
「ぼっくでぇぇす！」
銀介はテンションをかなり上げて、叫んだ。
「……」
「すみませんでした……」

森に着いたところで、迷わないように木に印をつけていく。木の枝に、銀介がサイで印をつけるそうだ。
「あれ？　ウンディーｎ」
「いますよ、ここに」
全部言い終わる前に即答。
「さすが、ウンディーネクオリティー……」
「銀介さん、殴っていいですか？」
これも、ウンディーネクオリティー。
その深い森に、銀髪の人のものと思われる悲鳴が響いた。
「で、ヒカリのカケラってどこら辺にあるんでしょうか？」
「んー。もう少しかな？」

そんな感じで歩き続けて、足が棒になりかけたころ。
「着いたよ。ここだね……」
見上げると、大樹の葉の中に何かが光っている。それは、見覚えのある暖かな光だ。そして、その光の下には――。
「――人？　何で、こんなところに？」
その声を聞いて、人影がこっちを向いた。
長い髪が、風で揺れている。その顔を見て、銀介が固まった。
「久しぶり、蹴り鬼君？　それとも、銀介って言った方がいい？」
顔にかかった髪を上げながら、彼女は言った。

第27話

ガキンと、何かがぶつかる音がした。見ると、後ろにいたはずのウンディーネが消えている。
「あら、なんて血の気の多い……。ダメじゃない、あんたの所有物なら、鎖に繋いでおかないと」
ウンディーネの攻撃を素手で抑えつつ、彼女はにっこりと微笑んだ。
「何でお前が、こんなところにいるんだ……？」
「銀介……さん？」
こぶしを震わせ、睨みつけるように目の前の人物を見ている。
彼女はウンディーネから武器を取り上げ、そこら辺にポイと投げ捨て、ウンディーネを蹴り飛ばした。
「何でって？　そりゃぁ、ねぇ」
黒色のサイでムチらしきものを作り出してから、答えた。
「あんたを倒すために、ってところかな？」
そういってムチでさした。銀介ではなく、蒼を。
「あたしはクイーン。全を統べる最凶で最高な伏兵（こまま）」
次の言葉は、耳元で聞こえた。
「ごめんなさいね。お楽しみは先にいただく主義なの」
パシンとムチの音が響く。強い衝撃とともに、後ろにぶっ飛ばされる感覚。そのまま体を木々にぶつけ、意識がもうろうとする。
「あら、意外と弱いのね？　ぜんぜん、本気を出してもいないのに」
くすくすと笑う声がする。
「まぁ、いいわ。久々に、遊びましょうか？　蹴り鬼くぅん？」
「何年ぶりだろうな？　いいさ、今度こそ倒してやるよ」
サイで武器を取りだす。柄の長い斧。クイーンは、その斧を一瞥すると言い放った。
「へぇ、武器を使うことを覚えたんだ？　じゃぁ……」

クイーンの白いムチが、銀介の斧に巻きつく。
「同じ色で力が上回れば、こんなことができるって知ってた？」
「まだ、２色のサイを使えるのかよ……」
懐かしいものを見た銀介の持つ斧は、ムチの巻きついたところからその形を失い始めていた。

第27話（後書き）

「次回予告！！
『蒼が蒼じゃない！？　２人を引き裂く悪魔のささやき』
お楽しみに！」
「銀介さん……。ちょっと、いいですか？（怒）」
「すいませんでした……」

すいません、ちょっとした出来心です……。この小説は、後2話分ぐらいストックができているので、つい……。すいませんでした。

第２８話

意識も飛んで、微かに２人が戦っている音だけが妙に頭に響いていた。その音もだんだんムチの音だけが聞こえるようになってきていた。

「く……。か……はっ……」

「うふふ。もう限界でしょ？　動きが鈍っているわよ」

２人はその長い髪を風になびかせていた。男のほうは、すでに体力が尽きたようだった。距離をとり、息を落ち着かせる。しびれる右手を押さえて、周りの状況を確認する。

ウンディーネはクイーンの近くで倒れたままで、蒼は木に体を預けたままだ。２人とも意識は戻りそうに無い。敵は笑みを浮かべながら待っている。

しばらく経つと、同じ表情のまま銀介のほうに歩いてきた。ムチを黒く変え、ゆっくりと楽しそうに近づいてくる。

「やっぱり、最後はメインの色で締めるべきでしょ？　ウフフッ」

クイーンが止めをさそうとした時、２人の間に何者かが割り込んだ。その何者かは、青い目でその青い髪の間から敵をにらみつけていた。

「邪魔よ。あたし、弱いやつは嫌いなの」

「……」

「何？　聞こえないわよ。もっと、はっきり言いなさいっ！！」

黒いムチが空を切り裂いた。が、途中で止められた。

「俺の仲間に、手ェ出すんじゃねぇよ……。躊躇（ちゅうちょ）無しに切り裂くぞ？」

その声はいつもの蒼のようで、いつもの蒼ではない口調だった。

そして、黒いムチは蒼がとめている所から消えていった。それと同時に、黒いサイが蒼の腕を覆った。いつもの蒼の武器ではなく、

指のほうで5つに分かれていた。完全に覆われたあと、今度は赤色で模様が刻まれた。
「来いよ。相手してやるぞ？　強いやつは好きだろ？」
そういうと蒼は、蒼らしくない笑みを浮かべた。

第２９話

「そう。あたし、強い人が好きなの。でもね……」
そういうと、クイーンは息を整えた。
「あたしの蹴り1発でへたばる人なんかが、相手になると思って？」
「相手になるかどうかは……」
爪がクイーンの腕をかすった。
「手前（テメェ）しだいじゃねぇの？」
そういうと蒼は、白と青のサイで腕を覆った。色違いで、両手に鉤爪。
「来いよ。どっちの色でも消してやるよ」
「なかなか言うわね……。でも、コレならどう？」
クイーンのムチが、灰色に変わる。1人でクロスオーバーをさせたようだ。
「別に……。コレといって、障害は無いが？」
「そう？　でもね、1人で2倍のサイを使っているの。同じ大きさでも……ね」
ムチが空を切り裂く。それを両手で受け止める。
「っく……。なるほど、ダメージは2倍以上ってことか？　ま、1人クロスオーバーなんていう“サビシイコト”をしているやつなんて見たことねぇしな。コレは予想外だな。でも、コレも予想外じゃねぇの？」
ムチは再び崩壊していった。
「なん……で……？」
「白いサイと黒いサイに分けて分解しただけだ。いつもクロスオーバーしてくるやつに、対処しているからな。色混ぜれば、分解されないとでもおもったか？」
「確かにね……。でも、もう戦えないんじゃない？」
クイーンは蒼の両手を指していった。痺れる左手で、痺れの強い

右手をおさえたまま言い返す。
「確かに、もう戦わなくなるな。……あと、1撃でお前を倒すからな」
「何、馬鹿な……え」
動こうとしたクイーンの足には、何かが巻きついていた。その何かに、紋章のようなものが浮き上がる。
「コレは……！　天空軍のっ」
「ご名答。悪いけど、最後に力の確認させてもらうぞ」
そういった蒼の背後に、虹色に輝く巨鳥が現れた。

第２９話（後書き）

おまけ『もう一人の蒼』
＞ｉ１８４８７―８７８＜
背景ういててごめんなさい。

第３０話

意識が戻った私が見たものは、虹色に輝く巨鳥と主の姿。巨鳥のせいか、いつもと雰囲気の違う主。

「……」

「！……」

何か会話しているようだが、二人が何を話しているのか聞き取れない。かろうじて聞き取れたのは、会話の最後だと思われる主の言葉。

「消えろ」

その言葉をきっかけに、巨鳥が動き出した。きらめく体を大きく動かして、敵へと向かっていく。

――そこで、私の意識は再び途絶えた。

「どうして……？」

「……別に。疲れただけだ」

そういって、敵（クイーン）の足の辺りのサイを消した。いや、“消えた”といってもいいのかもしれない。この会話の前の出来事は、よく分からない。止めを刺そうと動いたはずの巨鳥が、クイーンの目の前で掻き消えるように霞（かすみ）と消えた。平然を装っているが、内心動揺している。太陽の光が、サイの粒子に反射してきらきらと輝いたことが頭に残っている。

「力の差が分かっただろ？　分かったらさっさ……と……行……け……」

そういうと、蒼は力を失ったように倒れた。

「蒼！　痛（ツッ）！」

動かない体に喝を入れて、蒼の元に移動した銀介はキッとクイーンをにらんだ。当のクイーンはやれやれと肩をすくめると、背を向けてどこかに歩いていった。「強大な力の代償は大きいわよ」そういい残して。
「ウンディーネ」
呼びかけで意識を取り戻した彼女は、ゆっくりと立ち上がった。
「無理するなよ」
「大丈夫です。大丈夫……　そんなことよりも……」
「ん？」
「あ、いや、なんでもないです。気にしないでください」
ウンディーネの手遅れかもしれないという思いは、知らず知らずのうちに大きくなっていた。

第３１話

「……で、どうする？」
「どうするも何も、あなたのせいですよ？　責任とってくださいよ？」
どうやらヒカリのカケラを見つけたまでは良かったが、戦闘中に気を抜いてしまい印としていたサイを消してしまったらしい。
「……ん……」
「あ、蒼。大丈夫か？」
「……俺は……？　……！　あれ、銀介さん？　大丈夫って、何がです？」
キョトンとしたような声を上げる。痛いのを我慢しているような声ではないようだ。
「気、失ってたんだぞ？　頭打ったし」
「それぐらいで、大げさですよ？　僕の頭から血が出てるわけでもないんですし」
そういって、頭をさすった。いつもの同じ声、いつもの変わらない不思議そうな表情、いつもの蒼だ。
「あ……、そうだ。蒼」
「はい？」
「サイ、使ってみろ。青色以外のな」
「……はい？　……銀介さん、僕のサイ……知ってますよね？」
「ああ。でも、やってみろ。もしかしたら……」
蒼はちょっと悩んだ末、集中し始めた。ブツブツと「青以外……青以外……」と小声で繰り返しつつ。蒼の両手の間に球体が現れる。青色ではなく白色だ。若干青が混じって、ビー玉のようになっているが。
「……うそ、できた……」
蒼自身、驚いたようだ。そして驚いたことに、混じっていた青色

を白に変えたり、黒1色にしたりとくるくると色を変える事が蒼にもできるようだった。そんな蒼を見て、ウンディーネは険しい顔をした。

（どうしよう……。運命の書と軌道が外れた。戻らなければ……。これはちょっとやばいかも……。それよりも……）

「どうした、ウンディーネ？　そんな険しい顔して？」

「どうやって帰るつもりですか？　日が暮れたら、危険なんですよ？」

ぱっと表情を変え、なんでもないような顔をした。銀介はそんな様子を見て、帰り方で悩んでいたと思ったようだった。

「え、どうやって帰るって……。まさか……」

心なしか、狼の遠吠えが聞こえた。……気がする。

そうしている内にも、日は無常にも徐々に沈んでいくのでありました。

第３２話

「いやー、助かった助かった。ありがとな、ギア！」
現在地、ＣＯＬＯＲ本部内の１室。

あの後、しばらくして。
「あぁ、いた。良かったガ！」
見慣れた茶髪。独特な口癖。ギアがランプ片手に、木の後ろから顔を出した。
「ギア！　良かった……。どうしてここが？」
「勘！　探し物は得意ガ」
ギアは懐から何かを取り出した。
「それは……？」
「コレは、移動式のワープ装置ガ。白阿修羅が持たせてくれたガ。コレの近くに集まるガ」
ブゥゥンと低い起動音がして、ワープ装置を中心に光の円が広がる。みんなが光の中に入ったのを確認するとボタンを押した。ワープ装置を中心に暖かな光の円が再び広がる。本部のワープ装置と同じような感じだ。しばらくして視界がぼやけ、周りの風景が変わった。
床に魔法陣が描かれた部屋を出ると待ち構えていたかのように声が聞こえてきた。
「良かった……。戻ってきた」
声の主は白阿修羅。近くには、黒夜叉もいる。
「良かったって……？」
「いや、うん。……その、ね」
「早く言えよ」
もじもじしながらも、白阿修羅が答えた。
「うん、じゃぁ……。実は、ワープ装置にネジ付け忘れてた」

「ええ！　じゃあ、下手したら戻って来れなかったって……こと？」
こくりとうなずく。こういうときの銀介はシックスセンスが働くのか、妙に勘が鋭い。
「うん、じゃねぇよ！？　戻れなかったらどうすんだよ！？」
銀髪が宙を舞う。……はっきり言って邪魔だ。
「ウンディーネから聞いたガ。原因は、あんただろガ」
「……そうだった。そうだったね……」
「とりあえず、直すから。ギア、ワープ装置を」
白阿修羅は装置を受け取ると、どこかに行ってしまった。

第３２話（後書き）

ご無沙汰です。生きてました。とある事からの疲れと思われるものにより、執筆がかなり遅れました。また、ｊｕｋｅｎとかいうものがあるようなので、しばらくの間休載させていただきます。必ず戻ってきますので、それまでお待ち下さい。ま、ひょっこりと顔を出す可能性がある……わけないか。行きたいところにいけそうにも無いので、そろそろ勉学に励むといたします。それでは。

第３３話

とある建物の１室。
「大丈夫か？　クイーン？」
男がそっと、震えているクイーンの背中をなでた。
帰った瞬間、ドッと噴き出すように疲れとも恐れとも呼べるような不思議な感覚がクイーンを襲った。その場に座り込んでから、彼女は動けないでいる。
「大丈夫……。大丈夫よ……　ナイト……」
自分に言い聞かせるような感じで、クイーンは返事を返す。
「何があったんだ？」
「……天空界（ホーリーフィールズガーディアン）の守護神に会ってきた」
やっとのことで口にした名前を聞いたナイトはその名前に関する記憶を探り始めた。その間に、クイーンは話を進める。
「今は“あお”って呼ばれているみたいだったけど、あれは間違いなくキングの言っていた守護神だと思う。でも、聞いていたより幼い姿だったわ」
ナイトは『守護神』と聞き、その存在を思い出した。
天空軍の第零部隊長。そして、存命する唯一の虹のサイの持ち主。高い戦闘力を持ち、彼が所属する限り天空軍に敵対するものはいないとまでいわれている。――ただし、数年前に行方不明になったと聞いたが。
「本当に守護神だったのか？」
「……間違いないわ。虹のサイを使ってきた。使い慣れてるみたいだったわ」
思わず虹色の巨鳥を思い出だし、体が震える。あの大きさで全色同時発動。明らかに使い慣れていて、能力が高くないと使うことができない離れ業だ。ナイトに聞こえないよう、そっと呟く。
「……私のせいで、良くないものを呼び起こしたかも知れないわ…

…」

「ん？」

微かに聞き取られたのか聞き返してきたが、なんでもないような素振りをした。

第３３話（後書き）

大地震があり、大変な状況なのですが、元より受験終わりのこの日曜に更新する予定があったので、本日更新させて頂きます。

第３４話

「ただいま。異常なし」
黒夜叉がワープ装置片手に帰ってきた。白阿修羅に装置を返す。
「私が作ったんだし、あったりまえ！」
にっと笑うと、机の上のブレスレットのようなものを黒夜叉に渡した。黒夜叉はそれを手首に付けて全体を確認する。
「どう？　いってたのって、こんな感じ？」
「……うん。デザインはあってる。性能確認したら、感想言えばいいんだよね」
「ああ。頼むわ」
ブレスレットは光を反射して黒く光った。なんとも白阿修羅らしい漢（おとこ）っぽいデザイン……ではなく、女性が使っていてもおかしくないような、かっこかわいいデザインとなっている。
「コスプレにも使えるし、いいってこと！　にしても、再現上手いなぁ……。これで、アクセラレータの性能入ってんだろ？」
“アクセラレータ”これは本来ＩＴ用語のひとつだ。コンピュータなどの特定の機能や処理能力を向上させるハードウェアやソフトウェアのことだ。新たな機能を追加することもあるが、すでにある機能の性能向上をはかる点に着目した語だそうだ。
これはサイの精度などを向上させる機能をつけたためアクセラレータと名づけられた。
「ああ。貸してもらった漫画見ながらやってみた。あれって結構面白いね」
「お！　お前もはまった？」
うれしそうに黒夜叉が顔を輝かせる。白阿修羅は慌てて否定をした。
「誰が！？　でも、しっかり読んでみようかな……」
本音がポロッとでてしまった。

（そうだ、玄に続き借りよう）
「あのさ……　あ」
ふたりして同時に口を開き、ちょっと気まずくなる。先に口を開いたのは白阿修羅だ。
「は、早めに性能確認してね」
「お、おう。じゃあ、オレ行くからな」
思ったことと別のことを思わず言ってしまい、顔を背ける。白阿修羅はそっと離れていく足音を聞きながら、思わず黒夜叉のことを考えていた。

第３５話

「今回は２人で行ってもらおうと思う」
「……え！？」
２人が驚くのも無理はない。銀介が次の任務に選んだのは白阿修羅と黒夜叉の２人だったからだ。
『危険だから２人以上で行動』と決めたとき、戦闘力の高い２人は一緒に行動することもないだろうと高をくくっていたからだ。
「だ、大丈夫なのか？　オレたちを２人とも行かせて？」
「２人だからだよ」
間髪いれずに銀介が答えた。パッと地図を広げ、大陸の赤で埋めつくされている地域を指差す。指差された地域を見て２人は固まる。
「２人なら分かるよね？」
示された地域は火山地帯。活火山が多く、高い気温と少ない酸素の地域。こんな所でまともに戦えるやつなんて早々いないだろう。そんな場所だが、なぜか凶暴なモンスターと言っていいような猛獣がうじゃうじゃといたりする。こんなところに行くのは正直、バカとしか言いようがない。
「できるだけ近くのところに降ろすけど、ここまでは歩いていってもらわないといけないから。大変だと思うけど、２人なら大丈夫だ」
銀介は笑顔というより、鬼畜的な笑み浮かべてそう言った。

「旅の人。どこへ向かわれますかな。この先は火山群しかありませんぞ？」
現地人と思われる人に、声をかけられた。当たり前だろう。死にいく人ぐらいしか通らない道なのだから。
「ちょっとした依頼で、この先に用事があるもので。腕のいいボディーガードがいるので大丈夫ですから」

にっこりと微笑みながら、適当に嘘をつく。「オレッ！？」と言いたそうな顔をしながらも、玄はそれにのり、うなづく。
「そうですか。腕の立つ者でも帰ってこぬものもいます。お気をつけて」
「ご心配ありがとうございます」
それだけ言い、その場を離れる。
遠くの火山を見つめ、白狐はつぶやいた。
「道のりは遠いわね……」

第３５話（後書き）

「白阿修羅と黒夜叉に忍び寄る影……。その影の正体とは……！
次回『絶体絶命！？２人に忍び寄る影』お楽しみに！」
「……銀介さん。３回目はないと思ってくださいよ？」
「……すいやせんした……」

ごめんなさい。悪ノリです。ごめんなさい。

第３６話

「ウァッ！」
「ほらほら、どうした！？　その程度かぁ！？」
顔の３分の１を覆うほどの大きさの仮面を付けた男が、意気揚々と黒夜叉に攻撃を仕掛ける。その速度は速く、武器がなくても当たればそれなりのダメージになりそうなほどだ。
この状況に陥ったのは、ほんの数分前にさかのぼる。

「酸素……少なくなってきてないか？」
「ん……確かに息苦しくなってきてる」
火山ガスを吸い込まないよう、布で口と鼻を覆っているが、その分を差し引いても息しづらいのがはっきり分かるほどだ。幸運なことに、初めの頃のまだ動き回れるほど体力があるときにしかこの地域の生物に出会っていない。この状況で戦いになると、とてもじゃないがまともに戦えない。
「おい……あれ……」
そんな時、黒夜叉の視界に火山ガス対策を何もしていない男が映った。しかも、２人を待っているかのように２人を見据えている。
「あいつ……」
白阿修羅がその男をみて、つぶやいた。
「知り合いか？」
「ぼやけて、よく分からない。知り合いに似てるんけど」
その男がこっちに来いとでも言うように、手を動かした。
頭のぼんやりしている２人は、呼ばれるまま、男のほうへと歩いていった。
「久しぶり。懐かしいね。……白狐？」
そういいながら、にっこりと笑いかける。
「その声……」

声を聞き、白狐が思い出したように声を上げた。しかし、それをさえぎるように男が口を開いた。
「今はルークっつーんだ。悪いけどさ、ちょっと頼まれごとがあってね。……死んでくれねぇ？」

第37話

「いや、死ぬまでいかなくていいか。とりあえず、意識を飛ばせばいいか」
風を切る音が2人の耳をかすめた。そして、1拍おいて2人の体が後ろへと飛ばされた。
「きゃぁあ！」
「うわぁっ！」
飛ばされた白阿修羅は頭、黒夜叉は背中をしたたかに打ちつけた。白阿修羅はそのまま動かなくなってしまった。
「大丈夫か、白狐！　白狐！？」
黒夜叉が懸命に呼びかけるが、反応がない。
「白狐はもう飛んだな。あとは玄だけだな？」
ルークがゆったりとした動きで近づいてくる。青龍刀を取り出し、いつでも応戦できるようにしておく。
「オレの名前……。共通の知り合い……か？」
「さあ？　どうだろうね？　そろそろいくぞ」
ルークがかまえながら言い終わると同時に、武器を持つ手を狙って攻撃を仕掛けてきた。攻撃をはずしてもなお、攻撃を仕掛けてくる。その攻撃は身体能力の高い黒夜叉でさえ、攻撃をさばくので精一杯なほど早い。
「ウァッ！」
「ほらほら、どうした！？　その程度かぁ！？　もっと楽しませてくれよ！」
攻撃をはじいた勢いで、倒れる。ルークは精神が高揚しているのか、その顔にゆがんだ笑顔を浮かべる。
「お前はいっつもそうだったよなぁ！　戦っている最中に絶対に転ぶ。ここぞっていうときほどな！」
ルークは口元をペロリと舐めると、武器を作り出した。盾と剣が

一体化した特殊な武器だ。その武器の盾の部分にマークが刻まれている。そのマークを見た黒夜叉は目を見開いた。
「そのマーク……　翡翠(ひすい)か……？」
その言葉を聞いたルークは顔色を変えた。
「その名前で呼ぶなと言っただろうっ！！」

第３８話

「オレはあの名前を捨てた！　今は『王を守る鉄壁の壁（こま）』ルークだ！」

そう叫びながら、全力の一撃を加えようとルークは腕を振り上げた。黒夜叉は反射的に目をつぶったが、いくらまとうとも腕は振り下ろされなかった。

「何やってんだ！？　玄！」

名前を呼ばれて目を開けた。そこには、見慣れた後姿。

「――ノーム……」

「何だ？　テメェは？」

ルークは押さえられた腕を振りほどこうともせず、そう言った。

「へ。ちょっとわけありでね。こいつに死なれちゃ困るんだ。……玄、白狐にもらったものは試さなくてもいいのか？」

ノームは名乗ろうともせず、玄にそういった。

黒夜叉の腕についているブレスレット（アクセラレータ）が、光を反射して輝いた。

「ありがと、ノーム。忘れてた」

立ち上がり、教えられたとおりにアクセラレータを使い始める。キィィと機械音のような音が響き、アクセラレータが光を放ち始める。

「何だ、それは？　……まぁいい。起死回生の策があるようだが、つうじねぇのはかわらねぇ」

余裕たっぷりのルークに黒夜叉が、攻撃を仕掛ける。さっきより、格段に攻撃速度などが上がっている。それを見てなのか、余裕たっぷりだったルークも顔がこわばった。

「なる、ほどな。能力を、底上げする、アクセラレータか。だが――」

唸りを上げていたアクセラレータは、徐々にその光を弱め、機能を止めた。アクセラレータが止まると、もちろん底上げされていた

黒夜叉の能力も元に戻る。
「半端もん渡してきたお友達を恨むことだな」
そのセリフを最後に、黒夜叉の意識は途絶えた。ルークの蹴りを受けて。

第３９話

「よーっす。ただいまぁ」
その男は軽々と大人２人を肩に担いで、ドアを蹴って開けた。肩に担いでるのは、白髪ツインテールと黒髪の男だ。ついでにその男を支えている側の手で、猫とも犬ともつかない生物も押さえている。
「おつかれ、ルーク。……そのおまけは何？」
腕を組んだまま、ルークを一瞥してクイーンはぶっきらぼうに言い放った。「おつかれ」の裏に「当然でしょ？」というニュアンスが漂っているが。
「伝達役は必要だろ？　早めに片付けたほうがいい。よっと……。頼むぜ、クイーン」
肩から３人を降ろしつつ、そう答えた。２人を壁に体を預ける体勢になるようにさせる。
「ああ。このスピリットはどうする？」
「エレメンタルにしたほうが、術はかけやすいわね。キングを呼んできて」
クイーンはサイで何かを形作っている。時折呪文のようなものも唱えつつ作っているので、傍から見ると怖い。
しばらくして出来上がったものは、片手で持てる大きさのハープだった。白と黒のサイしか持ってないはずだが、ハープには桃色の線や水色の線など別の色も混じっている。
「つれてきたぞー」
扉が開き、意気揚々とルークが入ってきた。その後ろにキングの姿もある。キングはノームの傍に膝をつき、軽く手をかざした。束ねられた横髪がちょうどキングの顔を隠す。隠されて分からないが、心なしか笑っているように見える。
「……なるほど。たしかに珍しい。これをエレメンタルにすればいいのだな？」

そう言うが早いか、早速呪文を唱えだした。唱え終わると同時にノームの姿が変わった。
「ありがとうございます。では……」
クイーンは出来上がったハープを演奏し始めた。

第４０話

「銀！　ノームだけが帰ってきた！」
エリーは扉を荒々しく開けながら、叫ぶように言い放った。
「でも、何か変なの！」

ノームはぐでっとした様子で、力なく弱弱しく肩で呼吸を繰り返している。
そして目に見える異常として、スピリットとエレメンタルの中間のような――獣人というのがあっているような姿で横たわっていた。
「ノーム、話せるか？」
「だい……じょ……ぶ……だ……」
「無理しなくていいから、覚えているだけ話してくれ」
力なく途切れ途切れなノームの言葉をつなげると、「白阿修羅と黒夜叉を返して欲しくば、役者を連れてこい。幕はもう開けた」という言葉だけが脳裏に残っているという。――正直、何のことだか分からない。
「役者ねぇ……。エキストラでも雇えってか？」
苦笑いしつつ、銀介がつぶやいた。
「役者……。情報が少なすぎるわね。ノーム、本当に他に何か思い出せない？　些細なことでもいいから」
エリーの問いにノームは首を横にふって答えた。その時――
「ただいま戻ったガ」
――ギアが妙に陽気な声を響かせ、部屋へと入ってきた。
「……どうしたガ？」
さすがに張り詰めた雰囲気に気がついたのか、急に声が真面目になった。そしてノームが視界に入ったのか、はたと止まった。
「私達もよくわからないの。帰ってきたノームはこんなんだし。聞こうにもウンディーネが居ないから、この状態から戻してあげられ

ないの。それに……」
エリーの口からノームの言葉を告げられると、ギアの表情が変わった。
「それ……　神話のセリフのコピーじゃないガ……？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6021e/

COLOR

2011年10月30日13時23分発行